

水上勉著<良寛>

良寛さんは今や日本で一二を争うぐらいに有名なお坊さんかな。一休さんと、どちらが有名というぐらいに誰もが知っている。一休さんのことを記した文章、伝記、弟子の日誌、言語録があるらしいが、良寛さんには詩歌しかない、家も弟子もなかった。家というのは僧侶が住む寺のことだ。良寛さんは三十歳過ぎまでは禅宗の大きな寺で修業したが、それ以降、放浪や詫住まい、五合庵にしばらく棲んだというが、小さい小屋での一人暮らし。江戸時代の新潟、山の麓で建付けのよくない、風通しのいい小屋は寒さが身に染みだと思われる。漢詩や和歌は書いていたけれど自分自身の日記や日誌はない、弟子もない、良寛さんの伝記もないらしい。それでもそれらの漢詩や和歌をもとに、推測の年表というのか、いつどこで、何をしていた、というようなことを調べた人がいるらしい。とはいえ、詩や歌は創造物で、史実でも解説でも主張でも教科書でもない。

生涯を放浪する、乞食する、こんな生き方は日本人特有のものなのか、いろんな国の人たちも放浪生活を憧れ決行しているのか・・・良寛さんや、山頭火や、放哉のように、後世に発掘され有名になり、「彼の人生は・・・」と語られる人よりも、多くに人たちが山や川で野垂れ死にしたと、飢えや寒さや病や絶望を抱いて死んでいったと想像される。ここで、「芸術作品 絵や文学を志して 放浪の旅に出 野垂れ死んだ人は 素晴らしい」「ただ生きんがため ただ今が まわりが 嫌になって というのは よくないよ」とは区別してはいけない。良寛さんは名もなき“野垂れ死に”の人たちと同じように、「ただ放浪がしたかっただけ」とオレは思いたい。感心するのはあの当時、あの生活で、七十歳後半まで長生きするとは、身体も精神も頑丈なんだね、驚きだねえ。

先生は、良寛さんが、なに故に働かなかったか、一家を構える僧侶にならなかつたかと言われる。大本山永平寺とまではいかないが、立派な道場である円通寺で、傑僧といわれた国仙の弟子となり、長い間修業を重ねた。僧侶なら寺に住み寺を守り、冠婚葬祭の旗手に、当時の戸籍係に墓守りに、村の惣領に、教育係に、もちろん仏教の布教者に・・・

良寛さんは、経を読んで乞食はするが、僧侶として村のために人のために動かなかった。先生自身も禅宗の寺院で小僧時代から修業をしたことがあるので、禅宗の寺院の裏も表も知っている。日々の暮らし、作法、規則から、どこの誰が傑物で、あれはよくないこれはよくないという裏話まで知っておられる。ほとんどの僧侶は修行を終え、各地の寺を転々として住職になれる人はなるといふ。良寛さんが修業した岡山県玉島の円通寺の家風は、礼拝看経、学識探求するより、勤労が第一だといったとみてよい。人間は朝な夕な何かをして喰わねばならぬ。座禅、礼拝、読書も必要であるが、一にも二にも手を汚して労働することが肝要である。先生は、文学者として、良寛の残した膨大な詩や歌を知り、良寛を大いに敬愛する一方、なにゆえに働かない、あの有名な飢餓の時代、飢饉の時代、あの地域に住んで、貧しく飢えている百姓や市民から、乞食とはいえ、食料を酒を得ていたことを指さしている。

◎江戸期に近藤万丈という人の文章が、<寝覚の友>という冊子に載っている。嘘か本当かはわからない。

おのれ万丈、よはいいと若かりしむかし、土佐の国へ行しとき、城下より三里ばかりこなたにて、雨いとふり日さえくれぬ。道より二丁ばかり右の山の麓に、いぶせき庵の見えけるを、行て宿乞いけるに、いろ青く面やせたる僧のひとり炉をかこみ居しが、喰ふべきものもなく、風ふせぐべきふすまもあらばこそといふ。雨だにしのぎ待らば、何かは求めんとて、強てやどかりて、小夜ふくるまで相対して、炉をかこみ居るに、此僧初にもものいひしより後は一言も言わず、座禅するにもあらず、眠るにもあらず、口のうちに念ぶち唱フルにもあらず、何やら物語しても、只微笑するばかりにて有しにぞ。おのれおもふに、こは狂人ならめと・・・ひに巳のこく過る頃に、麦の粉湯かきまぜて食わせたり。この庵のうち見るに、ただ木仏のひとつたてると、・・・何ひとつたくはえもてりとも見えず、このふみ何の書にやとひらき見れば、唐刻の莊子也。そが中に此の僧の作と覚し有て、古詩を草書にてかけるがはさまりある、から歌ならはねば、その巧拙はしらざれども、その草書、目を驚かすばかりなりき。・・・扇に賛を乞しに、「越州の産：了寛書す」とありしおば、覚え居ぬ。・・・「良寛さん、このころには江戸でも多少知られていたらしいので、創作かも・・・」

◎展覧会まで十日ばかりになった、ちょっと自然が見たい、近所の自然でいいから、ということで高槻の山のほうに車を走らせた。昔はよくこの辺り来たことがあったが、最近ほとんどご無沙汰、でも、走っているうちに思い出した、「うむ 来たことがあるぞ」「ここは知っている」「ここでスケッチをした 写真を撮った」目的の大原野森林公園は休日で駐車場が満車、しばらく走っているとお宮さんがあった、「ここで 止めて ちょい歩こう」と中へ入っていた。ここでちょっと修正、地図を確認すると、大原野森林公園はもっと先のほうで、何かの施設と間違え、満車と書いてあるので、後の車に気をつかい止めることもなく来てしまったのが怪我の功名、なかなかいいお宮さんだった。またまた話はそれるが、大原野は高槻市から京都府に入ったところ、京都の都の香りがプンプン、洛西辺りは結構有名な社寺が散らばっている。大原野神社・勝持寺・善峯寺・・・と、まだまだあるが・・・。

◎「お きれいだ」と思う景色、これはなかなかないけれど、鳥居をくぐって、村の鎮守様という感じの小さい神社、「大神宮社」という名前で載っている。祠から南の方角に明るく開けている、この開け方が美しい、南からこちらに向かって陽が射すが、鎮守の森のでっかい木に遮られ、祠のそばはまだらに光が射してくるだけ。陽の光が絶妙のバランス、大きな木はあくまでも黒く、下草は緑、黄が交った緑、赤が交った緑、青が交った緑、この色のバランスが素晴らしい。祠は朽ちてもない、かといって出来立てのピカピカでもない、程よく百年ぐらいの時間が経ち、緑の自然の中に木組が、黒瓦が、石組が配置されている。この、「お きれいだ」という景色は先日も見た。台風が去って、夕方には雨がやみ、「走ろう 今なら走れる」と安威川のほうに自転車を走らせたが、いつもの所、土手の上に階段を上がると、河川敷はまだ濁流に浸かっている。「ここはだめだ 向こうの土手の上を走ろう」と中央市場のほうに向かった。先日来、秋雨前線停滞で秋の長雨が続き、中央市場の南側の土手をここにきて何度か走っている。ここを四往復すればいつもの距離が走れる、河川敷が水浸しでも、泥んこでも、ここならなんとか走れる。台風一過の夕方、晴れ間が出て、先ほどの場所からこちらに移動して、土手に上がって息をのんだ。「お きれいだ」という景色、空もまわりもどす黒い色の中に、土手の緑が、川の流れが、中洲の草が、陽の光に照らされ、先ほどの、黄が交った緑、赤が交った緑、青が交った緑、に輝いていた。普段目にする安威川は、それなりに気に入ってはいるが、「光の射しよう 光の塩梅でこんなにきれいに見えるのだ」と感激した。走っているうちに陽が陰り、たった10分ぐらいの時間だったけれど、普通の夕方の薄暗い景色に戻っていった。中西プロが、「光のいいのはほんの一瞬、それを逃したら」とよくぞ言っていたが、まさにこれだねえ、「お きれいだ」と言ってごそごそカメラを出し三脚を組み立てているうちに、普段のどす黒い景色に戻ってしまう。

今回の展覧会は最近描いた新作を、全部新しいものを出そうと、たくさん絵を描いた。大きさも普段のものより何倍も大きい。150号・100号というものを何点か描いた。大きい絵はこれが最後かな、もうこういう展覧会はしないかな、なんてことを思いながら大きいやつを何枚か描いた。何歳になっても展覧会は恐いもので、「今回の絵は うまく描きあがっているのか」「レベルが落ちてはいないか」というように、小鳥のように、気弱に忸怩たるものが去来する。5月の四国の展覧会は、ここ4,5年のお気に入り、展覧会に並べて多少評判の良かったもの、自身で納得したものを並べたおかげで、「われながら いい」「いい展覧会だった いい会場だった」と満足している。その点新作というやつは、「ひょっとして・・・」「まさか うまくいっていないのでは・・・」という気持ちになってしまう、ふたを開けるまではわからない。男盛りは五十歳代、それから二十年も経ってしまえば、力が弱まり、よたよた歩き、まだまだ負けていられないと昔の幻想に振り回され、「駄作のオンパレードではないか」ということが無いように願っている。

帰りスーパーマーケットに寄って食料品調達。「お サンマが出ている 例年通りの値段 百円だ」と見ているが買おうとは思わない。不思議だね、去年までは必ず勝っていた、秋のシーズンになるとサンマを10回は食っていたが、喰いたくない欲しくない不思議だねえ。まだまだ恥ずかしながら腹が減る、毎日、毎食前には腹が減り、「飯が食いたい 早く食いたい」と思うが手が出るのは菜っ葉もの、たまに卵ぐらいの日々である。

辻仁成著<ECHOES-木霊>市の図書館では本の貸し出し期間が二週間ある、最近では10冊以上借りれるようになったようだが、いつも7,8冊借りて帰ってくる。図書館では、借りたい、読みたいという本と、読んだことがないが著者は知っているとか、この分野は門外漢なので読んでみようとか、題名の単語が気に入った、装丁が気に入った、というような理由で借りてくる。7,8冊の本の中で自身のお気に入りには、「お おもしろい」は2,3冊かな、せっかく借りた本でも、専門的過ぎてまったくわからない、オレの琴線には触れない、というようなことでパラパラ状態でそのまま返却する。気に入れば、その期間に読み切れなかったら、二度三度と借りる。オレのお気に入りにはほとんどが人気のない本で、いつでも何度でも借りられる。人気のある本とは、ネットやTVで盛んに登場するものだ。ひがみっぽい話だけれど、オレの絵もそういうメディアにちょっとでも載ると、がぜん人気が出るのだろうけれど、いまのところはまだそれがない、なので展覧会をしてもパラパラ人がやってくる閑古鳥状態である。話は脱線したが、この本「辻仁成」という名前を聞いたことがあるようなということで借りてきた。ECHOES-木霊という単語、ともにピンと来なかった。辞書を引いて、「エコー 反射か」と読み始め、「もくれい」は、「こだま あの山のこだま」と唖然として、自身の馬鹿さ加減、無知さ加減に笑ってしまった。慌てて調べた。この本はエッセイというか日記というかを思いついたままに、あっちに飛び、こっちを抑えつくられている。その飛び方、発想が面白いのでオレもそれを倣ってみたい。

オレはねえ、よく山に行く、山の中に入って黙々と歩く。仲間と登っている時、その人とはぐれてしまった時には大きな声で呼んだり、笛を吹いたりする。いつもは山の上に立って、「ヤッホウ」とは大声を出さないが、若いころにはふざけて何度も大声で呼びかけたこともある。「こだま」とは、「ヤッホウ」ぐらいに思っていた、ネットで検索するに新幹線のこだま号のことが大半を占めるなかに、「木霊」の話がある。

木霊：木の精霊。日本では古事記の頃より木の神の存在をうかがわせる記載があるとか。精霊の宿る木を、傷つけたり切り倒したりすると祟りがあつたり不幸災害が訪れたりする不思議な神通力がある。「ヤッホウ」の「こだま」も昔はこの精霊の仕業と考えられていた。科学的には大気中をつたわる音波が向こうの山から反射して戻ってくる現象。「エコー：音波、電波等の、波動すべての反射波」近代科学がどんどん出てくるが、この話はいつの日か。

自分に降りかかる出来事は何かの縁でどこか別の場所で生じた出来事とつながっていること多いような気がする。そして縁は縁によって連れ戻されたりもする。まさに木霊。響いてつながっていくこの木霊のような関係が、人の一生を構成する大事な要素だと思う。先生はこの反響も、自分の本性、自分そのものだという。響いて帰ってくる声の中に、人は隠していた本来の自分を見つけることができるのかもしれない。

道元：池に映る月を見る時、人はすぐに夜空に輝く本来の月の姿を探す。誰もがそうするに違いない。それはきっと心の中で、月というものは夜空に輝き、人が見上げるもの、と固定されたイメージが出来上がっているからであろう。

夜空に輝く月の存在も、池に映った反射月も、どちらも共に同じ本物、真実の月である。昨日縁取った光や打ち寄せた波も、今日の光や波も、明日の光や波も、違わない。

道元の話を読んで、荘子の胡蝶の舞を想った。寝ている自分の上を舞う蝶、寝ている自分が蝶を見る、飛んでいる蝶が自分を見る。そのうちに寝ている自分が、飛んでいる蝶に乗り移り、飛んで蝶になった自分が、寝ている自分を見る。自分があるのやら、蝶がいるのやら、ここらあたりは宇宙の話かもしれない。

「きみい その解釈はちょっと違うよ」と言われてもかまわない、この話はどンドンオレの中で増殖変化し、勝手なものに化しているかもである。モノの存在、オレの存在、これらが混沌と、あちらこちらに存在している、存在もないかもしれない。固有名詞も自我もいらなくなっていく。モノの存在自体、オレの存在自体、在るのやら無いのやら、という気分、これはいいねえ、この調子で生きていかなくては・・・。

展覧会の飾りつけが明日に迫った。初日二日目は会場に行けないので、明日に備え準備怠りなく用意をしている。いつもの展覧会では飾り付けが終わって、その会場写真を持ち帰り、絵の解説文などを用意したが今回は今日中だ。

●121117-150 : 1830x1167mm : mixed materials on canvas 「演奏会」

「テーマは なんですか」と問われた時に、「テーマ 我ながら生涯変わらないねえ」と思う。この絵は三十歳頃に聴きに行った演奏会の景色です。それ以来今まで、何度もこのテーマの絵を描きました。今回も大きな白いキャンバスを前にして自然と筆が動きました、このテーマに沿って描いていきました。この絵はほとんど抽象化していますが、実はバイオリンとセロとチェンバロですぞ。

●291017-50 : 1167x910mm : mixed materials on canvas 「ダンス」

「人が踊る」と聞いて何を想像しますか、「そう その踊りです」 どういう姿態で、どういう体つきで、空間が埋め尽くされるのか。どういうテンポで、どういう音にのって、時間が流れていくのか。「おなじアホなら 踊らにや、そんそん」オレ こんど山に行ったら、「踊るぞ 暗黒舞踏 土方巽だねえ 田中眠だねえ」

●161017-100 : 2334x910mm : mixed materials on canvas 「わたしはわたし」

若いころからずっと、「人の形」をテーマに描いてきました。人の動き、人の息づかい、人の姿態を描いてきました。山に登って、「木や 草や 花の 名前を知らない もっと 知っておけばよかった」と思いながら、「木や草がおもしろい 素晴らしい 引き付けられる もっと早く気付くべきだった」と感じるようになった。いつの日か、木や草の息づかいを、描いてみよう。

●011017-40 : 1454x727mm : mixed materials on canvas 「わたしはわたし」

このシリーズの絵を描き続けています。人が手を伸ばしあっている、話しあっている、笑いあっている、いさかっている、この絵の主人公は何をしているのでしょうか。キャンバスを2枚くっつけています。この方法が不思議とうまくいく。まん中の線が緩衝材になり、「次元の違ったものが生まれるかも 絵が生まれ変わるかも」と期待しています。

●080917-30 : 910x910mm : mixed materials on canvas 「わたしはわたし」

描き始めた当初は、「いいな いいね」と進めるうちに、「あれれ ? まだまだ・・・」ということが続き、時間がかかった絵です。わたしの顔、きみの顔、あなたの顔、顔を描いています、「オレ自身の 顔の 形象文字です」これに、手が追加、足が追加、それに何が追加かな、というように増殖する絵もあります。オレの絵がますます抽象化の様子が進んでいます。

●090917-60 : 1820x910mm : mixed materials on canvas 「わたしはわたし」

美術関係の人にとって、色は、日曜茶飯事のこと、生活のまわりにいつも在って当然のもの。絵、なんて、大仰に申しませんが、小さい画面の中に、色の形が、組みあわさっているだけです。色と形が、うまい具合に配置されていればいいのです。赤色はよく使います。黄色っぽい赤、あかあかしい赤、渋い赤、踊る赤、粘りつく赤・・・。絵の具やに行けば百色以上の絵の具が並んでいるが、オレが使うのは二十もないねえ。

●301017-30 : 910x910mm : mixed materials on canvas 「サイクリングヤロウズ」

自転車の絵もたくさん描いた。時には自転車がバイクになったりもする。緑のなか、水のそばを走る。風が顔に当たる。大きな木が、小さい山が、見え隠れする。オレ自身は俗にいう“ママチャリ”と呼ばれる普通の自転車で、あちこちを動き回っている。「え そんなところまで 自転車で行くの」と驚かれるぐらい遠出している。好きな場所は川の河川敷だ、急坂がないからね。

●280917-50 : 1167x910mm mixed materials on canvas 「サイクリングヤロウズ」

絵を描き終わると、日付とサインを入れます。日付は日・月・年の順番に入れます。二十歳代に見た、“ホルスト・ヤンセン展”(ドイツ1929~1995) デッサンのうまい絵描きでした。サインの横の日付の書き方を見て、これを真似しようとそれ以後続けています。サインはTAKAと書いています。それと写真撮影の話、いまだに、夜、ライトを照らして、フィルムカメラで撮影しています。

清水精一著<大地に生きる>1888年明治21年大阪高槻生まれ。青春期に人生に煩悶し、禪を学び、比叡山に聖者を訪ねたが、悟りが開けず、大阪の貧民窟に身を投じた。この本は彼の回顧録である、と解説がある。乞食の中間に身を投じたのが、大正時代と思われるが、オレが生まれる30年40年前の大阪の様子、乞食とはどんなものか。

◎山の漂泊民「サンカ・マタギ・木地屋」

◎海の漂泊民「家船えぶね・イトマン漁夫」家船の民は生涯、船を棲みかか回遊し漁業する零細漁民。

◎芸能漂泊民「クグツ・遊女」

◎宗教漂泊民「歩き巫女・空也・一遍」

◎1970年代、箕つくりの女房が笹で編んだ籠を売りに来た。いいきなので2個買った。

◎サンカは旅、放浪を伝統的生活態度としている。野に、橋の下に、小屋掛けし、辻堂の軒下に泊まりながら、海川で魚を捕った。

◎香具師、土工、鉱山労働者には、親分親方がいる。サンカは、独裁独立自由に干渉も受けず、仲間としてやっていく。仲間同士の連絡連携がとられ、仲間の義理あいを欠くものは、死の制裁が待っている。

◎サンカは、救われない癩病患者を憐れみ、重症のものでも仲間に入れる。当時、癩病患者は血縁者からも社会からも捨てられた。「あの病気はうつらないよ かわいそうじゃないか」と中の人言う。

「あいつは こじき のような奴だ」「あの国は こじき 外交だ」侮蔑、差別の言葉として知人と話していても聞かれる言葉だ、この言葉が出ると気持ちがヒヤリとなる。「乞食（こつじき）は僧侶がするもの 尊いものだが こじきは 物乞いするもの」俺はそんなふうに区別していたが、この区別はよくないことかなと思いだした、そう思っている。人通りの多い道で椀を前におき背を丸めて座り、辞儀をし続ける姿を最近は見かけなくなった。まだ繁華街に行くといえるのかいないのか、最近まで見かけたような気がするが、この大阪郊外の茨木では物乞いをする姿は見ない。

◎先生：地上の生活で一番素直に、恵まれるまま生きていくものは乞食であろう。大地にひれ伏し土下座している姿は、なんとしても謙虚そのものとしか見えないのである。昔の先輩者が行乞を生活の最高規範とされたのも大いに味わうべき。桃水禅師は乞食になった。良寛和尚も家のある乞食。大灯国師は五条の橋下で乞食をした。釈尊も乞食道を歩んだ。（今日のこじきとは 隔たりがある 著者）近来の我々は、乞食的か泥棒的かである。俸給泥棒、時間泥棒。泥棒は万金を得ても、まだまだ足りぬと不平を言う。乞食は一銭の金にも、「ありがとう」という。

◎先生：当時、大阪にミカン山という丘があった。今の大阪市立大学病院あたりか、大阪市立美術館あたりか、20～30メートルぐらいの台地になっている、そこは当時雑木林でミカン山と呼ばれていたらしい。夕暮れであった。乞食から帰ってきて三々五々集まっている。小屋がたくさん建てられてあった。冬の夕方に焚き火で暖をとっている。林の中に何か所も焚き火が、いかにも自然だ。こうした生活人がいるのかと不思議な感じさえした。着ている着物は男も女も区別がない。貧民窟（一般貧乏人で乞食ではない）の人たちは疲れ切り、荒んだ相がよく看取される。経済社会からの落後者ながらなお資本主義の経済内にあえいでどん底にいる。そのてん、乞食は不思議にもパンの不安をもっていない。失業もなければ就職難もない。悠々と生きていける世界がある。先生何度も此処に通ううちに、決心し、頭に、仲間に入れてくれるように頼んだ。何か月か通ううちに、頭からも仲間からも許しがで、住人となった。仲間の平和を乱す裏切り者は極刑である。そして怠けてはならぬ。「乞食ほど怠け者はいない」と思っているのが社会一般の常識なのに。恵みに生きる乞食は怠けては食ってはいけないのである。

◎先生：今日は初めての乞食である。頭に聞くとまずは土下座して乞うのが一番楽であるとのことであった。一軒一軒門口に立つのはなかなか難しく、二三年経たなくてはだめだという。四天王寺の南門、ちょうど聖徳太子の御殿のある方である。小雨で濡れた地面に心を鞭打ちつつ土下座した。黙々と頭を垂れるのみである。隣で同じように座る

仲間が何倍も恵んでもらっている。「頭の 下げようが 足りないのさ」初めての少ない稼ぎを頭の“お母あ”に渡す、
「ずいぶん稼ぎが少ないねえ」

◎先生：乞食は修業だという、「そうかなあ」とオレは首を振りながらも、話は続く。西大阪の繁華街、屋台、香具師、露店が並ぶ中に、松島遊郭がある、ここは夜の稼ぎがいい。乞食となれば物貰いは生きていく手段、人は生活の手段となれば技巧を交える、虚偽も生まれる、しょせん人間は一切放下着（ほうげじゃく-禅語で着は命令形助辞、棄ててしまえ-ここまで聞くとオレには意味がわかるねえ）にはなかなかかなれない。

◎先生：春になると高野山や京都に出張する。天竜寺の雲水も大阪へ遠鉢するそうだ。仲間のひと組は百五十人ぐらい高野山へ、私たちは十数人で京都東寺の弘法太子縁日の出稼ぎに行く。その日は島原遊郭の大夫の道中があるというので一層華やかだ。天王寺を夕方出発して、朝ごろに京都付近の村の藪の中でぐっすり朝寝。乞食はそのまま草の上にコロリと寝る。当地の頭に挨拶やら仁義を切って、いよいよ土下座。乞食はただただ土下座するに尽きる、というが、技巧や虚偽が必要である、人の弱点を利用して突いていかななくては。私も乞食に慣れてきて、あの人はいくれる、あのひとは一銭くれる、十銭くれると見当がつくようになってきた。真の行乞をしなければいけない自分が、情けない物乞い技巧を自然と会得し始めている。一灯園同人の托鉢行者の姿も見えるので心の中で挨拶をした。

◎先生：帰り道、「田舎はだめだ くれるものは 半腐りの麦飯ぐらい」「馬鹿いうな この頃の乞食は 贅沢になりよって 腐ったものを食べても 中毒しないのが 一人前の乞食」なんと東海道筋を帰るといふ、故郷の高槻を通るといふ、私はまだ乞食になって人家の門に立ったことがない。我が家が見える、知人の顔が見える、みな異様な視線を投げつけるだけ。西国街道を、勝尾寺、総持寺とまわり歩く。

◎先生：松島遊郭は深夜の1時ころから人足が多くなる。乞食の稼ぎは普通、昼である。遊郭での夜稼ぎは深夜の1時から3時ころまで、物貰いの多いときは、十円札を二枚ももらうことがある。人力車がやってきて、「おい車夫 その乞食に これをやってくれ」十円紙幣が投げつけられた。乞食としては十日分の稼ぎである。先生はこの時、ツルゲーネフの散文詩を思い出す。

◎ツルゲーネフ 「乞食」 中山省三郎譯 : 私は街を通つてみた……。老いぼれた乞食がひきとめた。血走つて、涙ぐんだ眼、蒼ざめた唇、ひどい襤褸、きたならしい傷……。ああ、この不幸な人間は、貧窮がかくも醜く喰ひまくつたのだ。彼は紅い、むくんだ、穢い手を私にさしのべた。彼は呻くやうに、唸るやうに、助けてくれといふのであつた。私は衣囊（かくし）を残らず捜しはじめた……。財布もない、時計もない、ハンカチすらもない……。何一つ持ち合はしては来なかつたのだ。けれど、乞食はまだ待つてゐる……。さしのべた手は弱々しげにふるへ、をののいてゐる。すっかり困つてしまつて、いらいらした私はこのきたない、ふるへる手をしつかりと握つた……。「ねえ、君、堪忍してくれ、僕は何も持ち合はしてゐないんだよ。」乞食は私に血走つた眼をむけ、蒼い唇に笑（ゑ）みを含んで、彼の方でもぎゆつと私の冷えてゐる指を握りしめた。「まあ、そんなことを、」彼は囁いた、「勿體ないでさ、これもまた、有難い頂戴物でございます。」私もまたこの兄弟から施しを享けたことを悟つたのである。

月日が流れ、土下座の行も難しいものであったが、一軒一軒の門口に立つようになった。船場や島之内の邸宅街は使用人によって追い払われる。貧乏人の街は生活苦にあふれ、心やすく自然同情がわき、乞食のもらいが多い。私も行乞三年、傲慢な自分が下座し大地の温かみと土下座行の尊さをうれしく思うようになった。

この仲間の乞食は「サンカ」の一部に属するものと思っている。山窩という言葉は明治時代警察が名付けたものだ。

11月の下旬だ、もう年の瀬も間近だ。今は展覧会の真っ最中、11月末の30日で展覧会は終わる、今で半分ぐらいの期間が終わったか、展覧会は二週間の長丁場、ギャラリーに詰める日は半分ぐらいにしている。

今、河川敷を走っている、何時だろうね、自転車で安威川土手に着いた時にはまだ明るかった、家々の隙間、太陽が西のほうに沈もうとしている、雲のまわりをオレンジ色と黄色、そこに白色と濃いグレー色、それらが織りなす毒々しい色模様だった。えかきのオレが、「きれいな色」とはいわず、「毒々しい色」という表現は「いかがかねえ」と反省を交えて思い返している。今回のこの色の表現はどうも気分的なものから来ているようである、「気分がさえない」「何か面白くないことでもあったのかねえ」と逆に聞いてみたいようだが、あの沈み込む太陽とまわりの雲の景色は、歌舞伎役者の派手な衣装のようであり、毒々しい色であった、ということにしておこう。

走り始めて、どれぐらい経ったか、もうほとんど夜の暗さ、夜のとばりである。＜夜のとばり-と言葉が出て、何のことかねえと調べるに とばりとは帳、幕が下りるのだねえ、夜のペールだねえ＞ 不思議なもの、徐々に暗くなっていくさなかに、目が慣れているのか、北に向かって走っていたが、上のほうの空、陽の光のオレンジ色だとか紫色だとかがまだまだ残っている、残っているなど思っているそのあとで、「あれれ」オレンジ色だとか紫色だとかが見られなくなって、暗いグレー色、青色しか感じられない、空もが闇になり始める。夜に来る時はライトを持参して走っている、山の登るときに使うヘッドランプを手を持って走っている。ライトを持つようになったのは2,3年前から、歳とともに目の感覚が衰え、前に来る人が感じられない、地面の穴ぼこが、水たまりが見えない。それ以前はもっとスピードも出ているにもかかわらず、「おお 人が 自転車が 犬が」と少し手前から感じられた。もっとも自転車で走っていた時、お互い無灯火で寸前まで気づかずたまげたことがあったが。

ICレコーダーをもって話しながら走っていた、文章を書くために録音をしているが、ここ1,2年ずっとそうしているが、今、スピードを上げると話せない、「あれれ」と困っている、と自慢げに話すというのは・・・去年の十月に福井県の山でひざを痛めた、「ま 大丈夫かな」と痛み止めを飲み翌日は経が岳を登った。帰ってから、「痛い痛い」と隣の整形外科に駆け込んだ。「すぐに治る いつものことだ」と高を括っていた、ひざ注射で、「これで治った」とすぐに歩きすぐに走っていたが、徐々に、「痛い痛い」がきつくなり、「もう 治らないのか 歩けないのか」「ま 十日もすれば 一カ月もすれば」と軽く考えていた。寒さがますます増し、痛みもますます増してまいってしまった。それでも毎日河原には行った、もちろん走れない、歩きもできない、自転車でならと、河原の草の上、力を入れて走った。使う筋肉が違うのか初めのうちはとまどったが、そんなことを三月ぐらいまで続けていた。河原を歩けるようになったのが五月ごろ、速足で歩けるようになったのが六月ごろ。もう治ったかなと大峰に登ったが、「岡村さん 足が辛そうだね」と指摘された。ひざを痛める前と同じように走れるようになったのが七月ごろか、「ええと 足を上げるのか 身体を前に 倒すのか」なんて本気で自分の体のぎこちなさを嘆きつつ、それでも日々に軽くなっていき、日々に治っていく感覚、嬉しかったね。そのあと走り方も以前のように、「もう少しスピードを上げよう 2,3年前は もう少し早かったのでは」「しかし スピードが出ない スピードが出せない」とさぼらずに毎日走っていた。8月9月が過ぎたころから、それまでペタリ歩き感覚が身体が宙に浮く感じ、走り感覚になってきている。10月頃から、「なんだか走れる 女の人ぐらいなら走れる もちろん早い女性にはかなわんが」という感じになって、毎日が楽しい、走ることが楽しい、汗をかく、ここ1,2年はあまり汗をかかなかったが、「汗びっしょ」という言葉が復活してきた。河原からの帰り、早く帰らないと、「風ひきそう」という昔のフレーズが戻ってきた。

夕方とはいえもう真っ暗な5時6時の河原を走りながら、土手の上、橋の上には車、車のライトが暗い川面を照らす。フルスピードで走る車群、信号待ちの車群、無数の車が右へ左へ通過していく。この街も人が多くなってきた、年々人が多くなっていく、駅に向かって歩いて知らない人ばかり、人だらけの街になってしまった。